
一番近くて遠い存在

べあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一番近くて遠い存在

【著者名】

Z5692D

【作者名】

あらすじ

中学2年生の澪《澪》の好きな人は2歳年上の・・・

出会いの春・・・

何もかもが新しくて新鮮な気持ちになる
そして別れの季節でもある春・・・・・

「澪 みお ツー！」

人目も気にせず俺の名前を大声で呼ぶ彼女

「澪みてー？？
新しい制服似合う？？」

そう言つて俺の前でくるりと一回つてみせる無邪気な彼女

去年まで一緒だった制服も今年から彼女は高校生

それにして、スカートが短い
少ししゃがむとパンツが見えてしまいそうだ
しかも、今日の彼女は一段と化粧が濃い

俺は、いつも彼女の化粧が気にくわない

田の周りを黒くしたり、ファンデーションを塗つたくつたり

彼女は、そんな事しなくても充分すぎるほど可愛い

大きな田に透き通るような白い肌そしていつもシャンプーの香り

「似合づ似合づ」

俺は、そう言つて彼女を電車に無理矢理押す

こんな短いスカート誰にも見せたくなかつたから端に彼女を寄せる

俺と彼女は毎日一緒に登校してきた

だが、今日から彼女とは別々の駅で下りなければならぬ

電車がこのまま止まればいいのに・・・・

なんて有り得ない事思いながら彼女を見つめる

俺の視線に気が付いた彼女は、不思議そぞろじながらせせりつと笑う

俺は、彼女が好きだ・・・

その気持ちに気づいたのは多分小6の夏だったと思つ

蒸し暑い夏の日

その日俺は掃除当番でいつもより遅い帰宅時間だった

友達と遊ぶ約束をしていたの俺は帰道を急いだ
そんな時だった、

近くの公園で錆びた音を響かせながらブランコにのっている少女

俺は、最初は誰か分かつたがすぐに彼女だと気が付いた

彼女はあの時涙を流していた・・・

そんな彼女に歩み寄つてやれなかつた自分

心から情けないとthought

そして、

あの小さな彼女をこの手で守りたいと思つた

彼女の名前は

奥谷 藍 あい

俺と彼女の歳の差は2歳

その2歳は、俺にとつては大きな差を感じさせた

大人な藍

ガキな俺

早く大人になつて藍を守れるよつた男になりたい

この頃からそれだけをずっと願つてきた事だつた

「 駅着いたよ？？」

藍の声で現実世界へと引きも出される俺

もつそこま、俺が通う中学校の近くの駅

彼女と過ごせる時間もここで終わり

寂しさを必死に堪え

「ばいばい

と俺は彼女の頭を撫でる

微かにシャンプーの香りがした

いつもその香りをかぐと彼女を抱きしめたくなる

それを必死に抑えて彼女に背を向ける

彼女の電車が発車するのを見届けて

俺は、彼女の頭を撫でた右手にキスをした

「俺、こんなキャラだっけ？」

苦笑いしながら独りで呟く俺

そして、今日もダルい一日が始まる・・・

ガラツ・・・

俺はダルそうに教室に入っていく

それぞれみんな話をしたり立ち歩いてふぞけたりいつも変わらない光景だった

俺はそんな今の和やかな雰囲気が好きだった

そんな中

「澪クン来たわよッ／＼／＼

女子生徒のグループがこちらを見ているのが分かる

最近やたら俺に話しかけてくる女子グループだ

好きなタイプやら
彼女いるのかやら

俺が何かを答える度にキャーだとカツ「いいー!だとか

俺が苦手なタイプの女子達

「おはよー澪ツ」

そんな時俺の視界に入ってくるやたら身長のデカイ男

彼の名は

齊藤 直樹

野球部のヒースで女子にもそれなりにモテている

「お～直樹朝からデカいな」

なんておどけてみせるがコイツが俺の一番の親友だ

「そーだあ澪？」

なんか女子達が澪に放課後話があるつてー

ニヤニヤとしながら俺の方を見てくる直樹

大体話の内容は、聞かなくても分かる

俺は、別にナルシストって訳では、ないが

まあまあ異性にはモテている方だと思う

多分今まで合わせるとクラスの大半には告白をされた事があると思う

だが、俺は付き合つうだとか別れただとか問題になるのが嫌で告白はほとんど断つている

「澪もいい加減彼女の1人や2人ぐらいつくれよ～」

直樹は1年前から付き合つていてる彼女とは今でも順調らしい

少しそんな直樹を羨ましいと思つ気持ちもあるが

俺は藍が好きだから女の子たちの気持ちは受け取れない

たとえその恋が叶わない恋だと知つても・・・・

俺は、直樹に苦笑いを向けて席を立つ

「おっおいーー！」

澪何処行くんだよ？もー先生来ちゃうぞ？」「

俺は、一瞬立ち止まって直樹に向かいピースをしながら

とだけ、吐いて教室を出て行つた

「保健室」

俺は、寂しい気持ちになつたりイライラした時保健室に逃げ込む習性があるらしい

自慢じゃないけど、この学校内で一番保健室への来客数が多いのは間違えなく大差で俺だと思う

保健室の前の階段は、創立76年の古い校舎のカビ臭い匂いと

最近塗りなおしたらしいペンキの匂いが混じつて嫌な匂いがする

その匂いを俺は、大体毎日嗅いでいる

建てつけの悪いドアを力ずくで「じあけ俺は保健室へ入る

「センセーいねえじやん・・・・・」

多分また、職員室でお茶でも飲んでるのだろう

俺は、お気に入りのいつもの一番窓側のベッドへと寝そべった

授業開始のチャイムが聞える

保健室の隣の技術室からなにやら木を切る音が保健室に響き渡る

中学校なんてビックリでも良かつた

毎日学校に来る理由が無くなつたからだ

前までなら、藍が居たから藍の顔が見たい一心で学校に来ていた

けど今は、俺には、何も残つていない

ゆづなじゅ、唯一の些細な楽しみは直樹の惚氣ほけを聞く事と放課後の部活ぐらうだ

「藍・・・・ツ」

藍は、今頃何をしているんだろう・・・・?

変な男に捕まつたりしていないか

藍を泣かされたりした田には、多分俺は正氣ではいられなくなるだ
ら

正直俺は、自分が怖い……

今にでも藍をめちゃくちゃにしそうで

田に田に歯止めが利かなくなる

そんな事しては、絶対いけない

だって俺と藍は……

ガラツ ！！

勢いよく開いたドアに俺は、びっくりしてベッドから飛び起きた

そこに立っていた一人の女子生徒は今朝騒いでいたグループの一人
だった

彼女の名前は、確か

川村 沙織

「どうしたの川村サン？」

俺がたずねると彼女は顔を真っ赤にして俯いた

「のつ・・・あのつ／＼／＼

もじもじといひひの様子を伺つて見てく

じれつたい・・・

早く言ひなひ言つてしまえばいいの

イライラを抑えながら田の前の女子生徒に作り笑いを向けた

兄弟

漆君
一
•
•
•
•

彼女いなしけたよれ

また、あの質問だ

確か昨日も同じ質問をされた記憶がある

澪は、気づかれないよう小さく溜息を漏らし

いつもの、作り笑いを浮かべ女子生徒に向かつて微笑む

パーティと明るい笑顔を澪に向かた

どうやら、澪の笑顔から勝手に彼女はいないと解釈したらしい

事実いらないんだけれども・・・

外から校門近くに咲いている桜が見える

保健室は、澪が知っている中で一番綺麗に桜が見える場所だ

外ばかり見て居る澪に女子生徒は面白へないといつ顔をして澪の注意を引いてゐとする

「桜好きなの？」

普段女子には、優しい澪だけれども桜を前にしては別だ
目の前で頑張つて自分に話しかけている女子生徒などお構い無しに
桜に見とれている

無視を続けて数分澪は、我に返りまた女子生徒の方に目を向ける

「え・・・ど」「めんなんだっけ・・・?」

澪は、面倒くさい事が一番嫌いだつただから今まで女子の告白も丁寧に断つてきた

変なフリ方をして後から、女子に騒がれるのがとても面倒くさかつたからだ

今日は、どんな断り方をしようと考えたときだった

「澪君好きな人って藍サン・・・・?」

思わぬ言葉にビックリして大きく目を見開いて女子生徒を見る澪

何故秘密がばれたのだろう?誰にも言つてない筈なのに・・・

「やつぱり・・・本当なんだ・・・
今日ね、実は見ちゃったの澪君が藍サンを撫でた方の手にキスしているの」

澪を見上げる女子生徒の目は、少し涙によつて潤んでいた

「ちちがッ・・・・!」

今まで何事にもクールな澪が必死で弁解する姿を見て女子生徒は、
本当なんだと直感した

「私じゃ駄目ですか・・・・? ?」

真剣な表情を向ける一人の女子に澪は、戸惑った

「こじで断ればこの女子生徒は、俺が藍の事を好きな事をバラしかね
ない

そんな事が藍の耳に入れば藍は何て言つだろ?・・・・? ?

俺たちは、絶対結ばれてはいけない

いや、結ばれることが絶対有り得ないのだ

「兄弟なんですよ?」

俺の一一番嫌いな言葉が田の前の女子生徒の口から漏れる

兄弟・・・・

その言葉に俺は、何年も苦しめられてきた

何故兄弟は、結ばれてはならないのか?

どんな男より藍を幸せにする自信が澪にはあった

やつ、俺と藍は血の繋がった兄弟

「…………」

澪は田の前の女子生から田を逸らして必死に悲しみを堪えた

「アタシなら、澪君をそんな顔にさせないよ…………？」

澪の弱味を握つたからか女子生徒は普段とは雰囲気は、全く違つた

澪の学ランのボタンに手を掛ける沙織

一瞬澪は、田を見開き驚いたが、拒む気力も無く沙織に自分の身を任せた

「藍サンとは、もういつかしたの…………？」

澪の体を澪のお気に入りの窓側のベッドに押し倒し、悲しい田で見つめる沙織

無表情で首を横に振る澪

絶対藍にそんな事が出来るはずがない、澪にとって藍は、純粋で綺麗なモノだった

そんな純粋で綺麗な藍を澪は自分の手で汚してしまった。いつも臆病になつていた澪

藍を抱きたいと思えば思つほど歯止めが利かなくなつて

その度に、そういうの名前も知らない女と藍を重ねては、体を重ねてきた

女を藍と重ねて抱いた後の自己嫌悪と罪悪感からいつしか澪は、自分は汚れているという感情が心の奥に植えつけられた

澪の上半身から学ランを脱がせたた沙織は、澪を前にして優越感に浸っていた

今まで高嶺の花で話もろくに掛けられなかつた澪がたとえ今だけでも真つ直ぐ自分を見てくれている

沙織は、1回限りの関係で充分だつた、澪の好きな人はお姉さんで自分では、とても叶わないと思つたからだ

「センセー來たらどーすんの？」

今までの澪とは、まるで別人のような低い声に無表情な顔

「先生なら、今職員室でお姉さんと話してゐから2時間目まで来な
いわ」

沙織は、それを知つていて澪を追いかけ保健室まで追いかけてきた
のだ

「ふーん」

また、あの冷たい表情を沙織に向け抵抗もせずただ沙織を見つめる澪

澪の首筋に唇の角度を何度も変え、澪の少し焼けた肌に吸い付く沙織
まったく抵抗もせずまるで、人形のように黙つてゐる澪に沙織は少し罪悪感を覚えた

下のズボンに手を掛けようとした時だった

「手震えてる……
処女なの……？？」

沙織の顔は、一瞬にして真っ赤に染まった

ガタガタと震える体を抑えて再び澪のズボンのチャックに手を掛けようとするが

怖くて、それ以上手が動かない……

そんな沙織の姿を見て澪は

「初めてをそんな簡単に捨てちゃ駄目だよ」

とだけ吐いてベッドから飛び起き脱がされた服を着始めた

沙織は、口を開くことすら出来なくなっていた

「ん、じゃ……そもそも藍入学式終わる頃だから」

手をひらひらと沙織に向かって振る澪に向かって

「バツバラしても良いの？……？」

いやっと口が開くよくなつた沙織は叫んだ

藍にだけ向けるあの優しい笑顔を一瞬見せた澪は

「バラしたきやバラせね？」

とだけ吐いてドアを閉めた

校門の前の桜がヒラヒラと澪の田の前に落むる

澪は、鞄を教室に残したまま帰る事にした

直樹に後でメールして鞄とつけてもらお・・・

ケータイのディスプレイを見ると9時30分を示していた

冷たくなった手をポケットに突っ込み駅へと向かう澪

確かに1時に終わると言つていたはずだから・・・と澪は、電車表を開く

藍の通つている私立高までは、電車とバスを使って20分程度で付くが

澪にとつてその20分間は何十倍も何百倍も長く感じた

「電車が来るまであと10分もあんのかよ・・・」

イライラしながらも時計を睨みつづける足が小刻みに一定のリズムで刻んでいく

そんな時だった・・・

「おー澪じゃーん！」

遠くからでも分かるような田立つ赤茶の髪の男が澪に向かって手を振つてくる

その後ろには、何人ものチンドラを引き連れている

「レン久しぶつ」

澪は、その男の肩に手をまわし舞造作に立てられた髪をくしゃくしゃと撫でる

「つか、澪お前その格好中学生だつた訳??」

見下すよつこ一や一やと澪に向かって怪しげな笑みを浮かべる男

そもそも、澪と彼があつたのは、澪が中学に入学してまだ間もない頃だった・・・・

「ひひ、奥谷何処へ行くんだッ!!」

一人の教師が澪に向かつて叫ぶ

「オメーに関係ねえだろ・・・・」

入学そうやう全学年の先生に田をつかれていた澪は、毎日教師と

喧嘩の日々に明け暮れていた

澪は、小柄な方だが喧嘩は、誰にも負けた事が無かつた
高校生、社会人でさえも澪に傷をつけられる者はおそれく今まで1
人もいなかつただろう

澪は、こんな毎日を送つていてが、学校を休んだ事は、一度も無かつた

どんなに熱がでよつと、どんなにダルくても

澪は、毎朝一人の女の為にだけ早起きし、一人の女だけの為につま
らない学校に来ていた

その彼女と一緒に通勤時間は、なんとも言えぬ幸福感で澪にと
つてはたつた一瞬のように毎朝終わつてしまつていた

澪は、毎日きちんと学校には来ていたが、いつも途中で帰つていた

「今日はサボらせないぞ！……奥谷席に着けッ！…」

その日は、一段と粘り強かつた社会の渡邊

いつもは、帰らせまいと頑張るものにいつも澪には勝てなかつた

小柄な澪とは、対照的にいつも着てている青い無メーカーのジャージ
が張り裂けそうの渡邊体を見ていつも噴出しそうになる澪

今日に限つては、かなりケツにジャージがめり込んでいて笑いを堪

えるのに必死だった

しかし、澪にとつてこの教師と張り合つ時間が案外樂しみだつたりもする

今日は、一段とじつに澪の右手を離さなかつた

澪は、その社会のバブ教師に向かつて

「センセー やよーなー、みなさん やよーなー」

とよべいる幼稚園児のマネをして、ダッシュで教室を出た
いつものよつに走つて追いかけてくる渡邊だがいつも途中で息を切
らし回じ回じ言葉を言つ

「明日もちゃんと学校来いよ……！」

叫びながらも渡邊はいつも優しい笑顔で澪を見送る

そして、澪もそんな渡邊の表情を思い浮かべながら少し口元を緩ませた

レン

澪は、学校を後にして駅へと向かつ

行き先も何のにいつもぶらりと何処かへ出かける澪

誰も居ない静かな場所を澪は、いつも探し求めていた

大抵澪が買い物などに出かけると覚えの無い女が馴れ馴れしく澪に付きまとつたり

知らない奴に写真を勝手に撮られたりなど面倒臭い事が沢山待ち構えている

適当に電車に乗り適当にバスに乗つて着いた所は、町外れにある海だった

もう夕日が沈みかけていて辺りは、オレンジ色に染まっていた

そんな時海を一人で眺めている澪に向かつて

話しかけてきた、いかにも不良といつ葉が似合つたうな男がレンだった

レンの親は、結構名の知れたヤクザでレンが後を継ぐことになつていた

しかし、レンは後を継ぐ氣などまったく無く遊び呆けていた

俺に適う奴なんて居ない・・・

自分の腕に相当自信のあつたレンは、ある時澪の噂を聞いた

『無敵の澪』

などとやつ誰かがつけたダサいキャッチフレーズの澪とやつ男を見てみたいと思つていた

写真を見ると喧嘩などといひな言葉が最も不似合ひやうな整つた顔の男だった

澪の噂は、喧嘩だけではなく女遊びの澪でも有名だった

澪と1回寝た女は、澪が与える快感の虜になる

そんな澪と一度でいいから拳を交えたい

そしてその日レンは、草を買ひに行つてコンビニへ向かつた

レンの田に海を見つめている小柄な男が田に入つたまわじく澪だった

レンは、歩きづらこ砂浜の上をおもいつきり走った

そして、レンは澪の肩に手を掛け

「お前奥谷 澪？」

「やうだナビ？」

といかにも不良っぽいドスの聞いた声で尋ねた

無表情の奥に不気味な笑みを浮かべ見下すようにレンを見る澪

「何だよ、その田は」

この台詞を言えば大抵の奴等がレンの前から走り去っていくが澪は、違つた

「こりゃかに微笑むかと思つと次の瞬間

「ゴスツッ！？」

鈍い音がレンの耳に聞えた

そして、鋭い痛みが下腹部に走つた

「ううっ・・・」

この瞬間生まれて初めてレンは負けを知つた

レンの下腹部に一撃を食らわせたのは澪の利き手右手では無く左手
だった

手加減された・・・？

どんな人よりもプライドの高いレンはものすごい屈辱感をつけた

「あんたが・・・レン？」

自分の名前を呼ばれ少し驚くレン

「俺の事知ってるんだ」

下腹部が痛くてレンは、つまむよつた格好で澪を見上げた

「アンタ有名なヤクザの後継者なんだ？」

プライドの高いレンをさかってなのか澪は、そのまま座り込みレンと同じ位置の田線にした

「ま、そんな有名なヤクザの後継者が自分の前で蹲つてるんだ
かりやぞ面白こだらうな」

睨み付けるように澪をじっと見つめるが澪は

「アンタちやんと親父さんの後継いで立派なヤクザになれる
そん時は、本気で握手してやるよ」

「うちは戯つぱり供のまじめな笑みをレンに向けたるヒレンに驚く
向か歩き始めた

レンは、澪に出会ってから父の後を継ぐ事を決意し、今となつては、レンは見違える程成長し、何十人いや、何百人の手下を従えるよくなつた

「おこ、澪あの時の約束まさか、忘れてねーだーるーな」

学生服姿の澪を馬鹿にするような田代一や一やと不気味に笑うレン

「レンと違つて俺は忙しい人なんだよ」

澪は、やつぱりレンの下腹部にパンチを喰らわせた

今度は、左手では無く澪の利き手の右手だった

「相変わらず、いいパンチ持つてんじゃねえか」

そう言つとレンは、澪の横腹へ拳を突いた

目を細めて今まで見せないような笑顔で笑うレンを見て、後ろにいた大勢のチンピラ達は、唖然とし声も出なかつた

「レンじゃ、立派になつたじやん」

あの時澪の左手でパンチされただけでも、レンは蹲つていたのに今となつては、逆に澪の横腹に一撃を喰らわすまでになつていた

2人は、田を合わせると人田も気にせず大笑いした

そんな時、一人の大男がレンたちの田の前で

「レンさんそろそろお時間では？？」

と時計を見ながらレンを急かした

「ああ、もうそんな時間か？」

澪は、これからどうすんだよ」

澪は近くにあつた駅の時計を見た、錆び付いて汚れた時計は10時30分をさしていた

「どうか行くんなら車で送つて行くよ」

藍の学校が終わるのはあと30分後、今から電車とバスで行つても間に合わないので

澪はレンの車に乗つていいくことにした

さすがヤクザともあつてフューラーのF430BIO Fuele良い車を持っていた

「女にでも会いに行くのか？」

またあの「ヤーヤ」と不気味な笑顔で澪を見るレオ

「まあな。」

ぶつむりひめつに答えた窓の外に田をやる澪

だが、レオは気づいていた澪の真っ赤になつた顔を経験豊富な澪だが藍に関する」となると小学生のガキのような態度になつてしまつ澪

現に今藍の事を思い出しだけで真っ赤になるのだから、そんな子供らしい澪の姿を見てレンは、やっぱりまだ澪は中坊なんだなと感じた

キキイッ・・・・・!

レオが、急ブレーキを踏むとシートベルトをしていなかつた澪は危なくガラスにぶつかりそつになつた

「澪、着いたぞ」

田の前には、藍が今日から通うことになつた私立高校

携帯のディスプレイを見るとまだ、11時ちょっと前で誰一人外に出でている者は、居なかつた

「じゃあ、俺もつ行くから」

レンはやつと車に乗り込み行つてしまつた

「相変わらず素っ気無え奴」

物凄いスピードで走り去つて車を見て苦笑いする澪

澪は、校門の前で藍が出てくるのを待つことにした

何分かして、ちらほらと人が校舎から出てきた

学生服で整った顔をしている澪は、とにかく目立ち中には、携帯を澪に向け何枚も写真を撮り騒いでいる女子生徒の姿もあった

なかなか藍がでてこないので澪は、しごれを切らして校舎の中に乗り込んだ

中学校とは、全然比べ物にならない程広い校舎

藍の姿は、何処にも見えなかつた

本當は、突然行つて藍にビックリさせてもうつと思ったが

澪は、計画を変更し、藍に電話を掛ける事にした

2回目のホールが鳴り終わつた時

『澪・・・? なんで澪が此処に居るの・・・?』

澪が顔を上げると携帯を耳にあて睡然としている藍の姿

「藍そんな所にいたのか、探したんだぞ?」

藍に近づきつつそのままの髪を横でよつと右手を差し伸べた瞬間

パチンッ！

校舎に響き渡る鋭い音

澪は、呆然とした

授業を抜け出してまで藍の為に此処まで来のに澪は、藍の喜ぶ姿さえ想像していたのに・・・

「今普通だったら、授業やつてるはずでしょっ！！！
なんで澪が此処にいるのよーーーー！」

人目も気にせず取り乱す藍に澪は、ショックを隠し切れなかつた

「こんな事してアタシが喜ぶと思つた?」

澪は、ギョッとした

藍の大きな瞳には、大粒の涙が浮かんでいる

小学生だったあの頃俺は、藍にもう泣かせたくない・・・
藍を守りたい、と思い藍を守つてきましたつもりだった

しかし、今藍が泣いているのは間違えなく俺自信のせいだ・・・

「澪には、ちやんと学校行つて、高校にも行つて欲しい・・・

藍に此処まで心配を掛けさせていた自分が物凄く情けなく思えた
「藍・・・めんな・・・俺ちゃんと学校行くから・・・もう泣か
ないで・・・」

優しく藍を撫で澪は、藍に背を向け歩いていった

「奥谷は、また学校をサボつたのか?!!」

その頃学校では、職員室で大騒ぎになっていた

「生徒の情報によりますと、1時間目から保健室に行くと言つたきり……」

教師全員が、またかとでも言つよつと呆れた顔をする

「校長、教育委員会にこの事がバレたら、我高の信頼はガタ落ちです」

同級生の親からも何度も抗議の声が挙がってきて教師たちも頭を悩ましてていた

そんな中

ガラツ・・・・・！

そこには、教師達の悩みの種

澪が立っていた

「奥谷ッ！－！－！貴様何処に行つてたんだ！－－！」

学年生徒指導部の山岸が大声を張り上げる

「すいませんでした。」

教師全員がぎょっとしながら澪の方を見る

あの、学校創立以来の問題児奥谷澪が頭を下げ謝罪をしてい

びつくりして、「コーヒーを噴出す教師もいた

「…………ツ……わ……分かつたから……授業に戻れ」

焦りながら澪に頭を上げさす教師達

それから澪は職員室を後にし、3階にある教室に向かつて歩いた
4時間目は、ちょうど社会で、渡邊が黒板に顔に似合わず綺麗な字
を書いている時だった

ガラツ・・

堂々と前のドアから教室に入つて、澪に生徒全員が唖然とする

沙織は、朝自分がした事を思い出し澪から顔を背けた

社会の渡邊もその光景を見て、ビックリしたがまた、あの優しい笑
顔で澪を受け入れた

「奥谷ー早く自分の席着けー」

やつぱり渡邊はまた黒板に向かい字を書き始める

窓に手をやると、桜が咲いていた、いつも保健室から見る桜とは、
また違う風景で

とっても、とっても綺麗だった・・・

学校には、来たものの便勉強道具なんて物を持つて来ていかない澪は、外の桜に見とれていた

そんな時、澪の制服のポケットから振動がくる

ポケットから携帯を出し渡邊にバレないよう慎重に携帯を開く

藍からのメールだった

澪、ちゃんと授業受けなさいよーーー！

澪の行動を見透かしたようにきた藍からのメールに澪は、普ッと笑つた

しかたないので澪は、隣の席の人からノートとシャーペンを借りた

桜が綺麗に咲き誇り全ての物がキラキラと綺麗に見える春

春が来て夏が来て秋が来て冬が来て、そしてまた、春が来る

今は、まだガキで藍に迷惑を掛けてしまう俺

けど、いつか絶対彼女を俺の手で俺だけの女にしてやる

だから、今からでも覚悟しとけ？

澪は、そう打ったメールを未送信ボックスに保存した
携帯をしまつと澪は黒板の字をせつせと写し始めた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5692d/>

一番近くで遠い存在

2010年12月9日05時06分発行